コミュニケーション支援作業部会報告

小泉浩一　田口悦津子　仲野真史　長峯美紀　野原隆弘　橋都由美子
宮坂美帆子　山本由佳　小笠原恵　藤野博

Ⅰ　コミュニケーション支援について

全ての教育的営みが子どもと周囲の他者とのコミュニケーションを通して成り立っていることを踏まえ、コミュニケーション支援は全支援区分の基礎基本として位置づけられている。したがって、主として生活支援や就労支援に位置づけられている授業の中でも、コミュニケーション支援の課題が設定されうる。コミュニケーション支援は、学校のすべての活動を通して取り組まれる。

学習指導要領においては、コミュニケーションに関する事柄は、主に自立活動の「コミュニケーション」や「人間関係の形成」で扱われている。具体的な内容をみると、幼稚部の教育要領から高等部の学習指導要領まですべて同じ文言が並んでいる。これは、コミュニケーションに関する実態が、障害の種類や程度によって様々であり、年齢や学部段階に関わらず一人ひとりの教育的ニーズに合わせた内容を設定することが期待されているからであろう。本校に在籍する幼児・児童・生徒においても、音声言語で流暢に会話をする子どももいれば、発語が難しくサインや絵カードでコミュニケーションをとる子どももおり、コミュニケーションに関するニーズは一人ひとり大きく異なっている。しかし、一方で、どのような人間関係への参加が期待されるかは、ライフステージごとにある程度標準化されうる。例えば、言語発達の段階に関わらず、児童期には同年齢の友達との仲間関係を形成することが期待されるであろうし、高等部段階では卒業後を見据えて学校外の公的な場での人間関係に参加する力が求められるだろう。

そこで本校では、平成１４年に現行の支援内容配列表を作成する際、コミュニケーションに関する個人の技能に関する支援とライフステージごとに期待される対人関係への支援を便宜的に区別し、コミュニケーション活動支援とコミュニケーション関係支援の２つの側面からコミュニケーション支援に取り組むこととした。この際、ＩＣＦの「活動」と「参加」という概念を参考にして内容を区分した(当時はＩＣＦの前身であるＩＣＩＤＨの改定作業の途中であり、ＩＣＩＤＨ－２とされていたものを参考にした)。

ＩＣＦの「活動」は個人の活動や能力の水準であり、「課題や行為の個人による遂行」と規定されている。これに関連するのがコミュニケーション活動支援である。コミュニケーション活動支援は意思疎通のための個人の技能や態度を扱う。個別の実態の差が大きいことを考慮して、

図１０．　コミュニケーション活動支援と
コミュニケーション関係支援

個別教育計画を中心に取り組まれる。例えば、「動作語の語彙を増やす」「絵カードでやりたい活動を要求する」などが個々の目標として取り組まれるかもしれない。

ＩＣＦの「参加」は社会的参加や社会的不利益に関する水準であり、「生活・人生場面との関わり」と規定されている。本校の支援内容区分では、コミュニケーション関係支援がこれに関連する。コミュニケーション関係支援は、子どもが持っている技能を活用してどのような対人関係に参加していくかを扱う。こちらは、ライフステージごとの代表的な内容を示したコミュニケーション関係支援内容配列表に基づいて取り組まれる。例えば、幼稚部段階では「家族に呼びかける」、中学部段階では「お互いに誘い合って活動する」などが支援内容として配列されている。今年度の研究では、このコミュニケーション関係支援について検討を行った。

Ⅱ　問題と研究の経緯

過去３年間の研究において、幼稚部と小学部を中心にコミュニケーション関係支援の検討に取り組んできた（表１４参照）。

表１４．　コミュニケーション支援に関連する過去３年間の研究テーマ

年度	研究テーマ
平成２３年	「幼児期の人間関係を育む生活と遊び　－人間関係の初期の成り立ちを探る－」幼稚部 「芋掘り」の授業研究を通して幼児期の人間関係を促す要素を検討した。また、「劇遊び」の授業研究を通して、前年度まで取り組んできた「人形遊び」と「劇遊び」の連関性について検討した。
	「子どもたちの言語活動の充実をめざした授業づくり」小学部 高学年学級の国語算数や重複学級の個別指導の中での言語活動を対象とした。コミュニケーション活動支援の系統化や教科学習の中でのコミュニケーション関係支援について検討した。
平成２４年	「子どもたちの言語活動の充実をめざした授業づくりⅡ」小学部 低学年学級の国語算数の中での言語活動を対象とした。コミュニケーション活動支援の系統化や教科学習の中でのコミュニケーション関係支援について検討した。
平成２５年	「児童期の人間関係を育む全員参加型授業　－友人・仲間関係を中心として－」小学部 重複学級の児童も含めて高学年の児童全員が参加する「つたえよう」の授業研究を通して、多様な実態をもつ児童同士の関係性を育む授業の内容や方法について検討した。

幼稚部では、コミュニケーション関係支援内容配列表の最初の段階として、人間関係の発達を促す初期の要素について検討を行った。題材として課題遊び「芋掘り」を選定し、人間関係の観点から授業研究を行った。その結果、幼児同士の関係性を育む上で、幼児が関わり合う行動スペースの設定（例、サツマイモパーティーの準備をするスペースの広さや幼児間の距離）共有物と私有物の設定と配分（例、畑への移動に使うリヤカーはみんなのもの、サツマイモを入れるバケツは自分のもの）がポイントとなることを明らかにした。畑への移動に際して、リヤカーという共有物を用いることで、順番に乗る、交代で乗るといった活動が導かれた。「行きに乗ったから帰りは友だちに譲る」というように折り合いをつける幼児もみられた。また、バ

ケツを人数分準備して収穫した芋を自分で管理できるようにしたことで、「自分の芋」「友だちの芋」といった意識が生まれ、交換する、半分こするといったやりとりも促された。

これらの検討を踏まえ、人間関係の初期の要素として自他の区別、あるいは自分のものと他人の物を区別することが重要であることが確認された。また、これに続く要素として寛容さや感謝、思いやりの表明といったことが挙げられると考えられた。支援内容配列表の改定に関しては、「自分の名前が分かり、呼ばれて返事をする」、「自分のものと友達のものを区別できる」を追加することが提案された。

小学部では友達や仲間との関係への支援について研究を行った。本校小学部は、自閉症を中心とした重複学級を設定し、低学年学級、高学年学級、重複学級の３つの学級で学部を構成している。重複学級では、個別の実態に十分に配慮できるよう少人数の環境で指導を行っているが、学級内のみで友達との関係に関する学習を設定することは難しく、同年齢の友達との関わりを保障する必要がある。また、高学年学級の児童においては、中学部への進学を見据えて、友達や仲間との関係を自分たち自身で形成していく力が求められる。こうした教育的ニーズに応えるため、小学部では、高学年学級の児童と重複学級に在籍する高学年の児童を対象に「つたえよう」というコミュニケーション関係支援に特化した授業を設定してきた。

大人との関係においては、児童の多様なコミュニケーションシグナルを大人がキャッチして応じる、あるいは大人が個々の児童に伝わりやすい方法で指示を出して(伝わらない場合には、繰り返して伝えたり、伝え方を修正したりして)、児童がそれに応じるといったように、児童の実態に配慮した大人の支持的な姿勢によってコミュニケーションが成立し、維持されていることが多い。児童同士の人間関係が成立するには、こうした関係の形成や維持において、子どもたち自身がより積極的な役割を果たさなければならない。例えば、互いに注目し合ったり、相手が注意を向けていなければ呼びかけたり、相手を手助けしたり、教えたり、また応援したり励ましたりすることが求められる。「つたえよう」の授業では、これらのことに児童が取り組めるように様々なゲーム活動を設定した。そして、1)音声言語だけでなくサインや絵カードなど、多様なモードのコミュニケーション手段が利用可能な環境を整えること、2)みんなで一緒に行う活動の目標やそれを達成するための互いの役割を可視化して共有すること、3)活動への動機づけを高めるように題材やフィードバックの仕方を工夫することが、児童同士の関係の支援に有効であることを明らかにした。

この授業実践を踏まえて、児童同士の関係においては、自分の要求を伝えたり、相手からの指示に応じたりするだけでなく、相手のために自ら何かをすることが求められるということが確認された。そして、コミュニケーション関係支援内容配列表に「友達や仲間を応援する」「友達の良いところを認める」といった内容を追加することが提案された。

Ⅲ　支援内容配列表の評価と改定

コミュニケーション関係支援内容配列表は、縦軸にライフステージの目安となる学部段階が示され、横軸に対人関係の相手が示されている（図１１）。これにより、ライフステージごとにどのような相手とのどのような関係に参加することが期待されるかが示される。また、幼稚部段階で家族との間で培った力が小学部段階で友達・仲間との関係につながっていくというように、ライフステージを越えたつながりを俯瞰できる表となっている。このように、幼稚部段階

から高等部段階までを見通す俯瞰図として支援内容配列表が機能するためには、各ライフステージの代表的な内容が選定され適切な場所に配置される必要がある。しかし、現行のコミュニケーション関係支援内容配列表では、各ライフステージの代表的な支援内容が絞られておらず、同じ内容が複数の箇所に記載されて全体を俯瞰しにくいという課題があった。また、幼稚部や小学部を中心に行ってきたコミュニケーション関係支援に関する研究の結果を反映し、新たな内容を追加する必要もあった。そこで、近年の研究を踏まえた新たな内容の追加と重複項目の削除を以下のように行った。

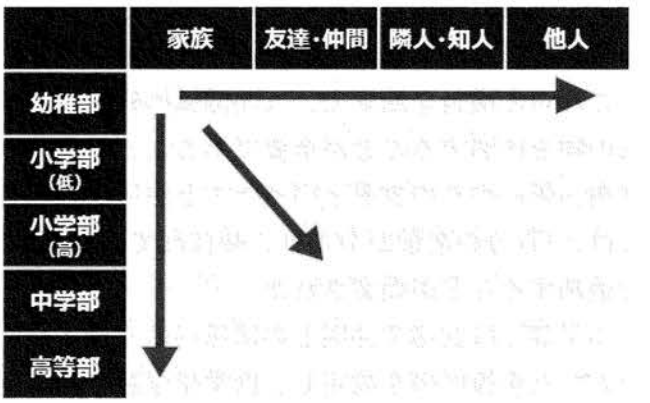


図１１．コミュニケーション関係支援内容配列表の構造

１．過去３年間の研究を踏まえた新たな内容の追加

幼稚部の研究から提案された自他の区別に関連する内容は、「家族からの呼名に応じる」などの内容で現行の支援内容配列表にも記載されていた。しかし、名前が呼ばれたときに自分のことであると意識して応えるという“自他の区別”に関連した内容であることが伝わりにくく、単なる呼名応答スキルのように取られかねない文言となっていた。また、全く同じ文言で幼稚部段階と小学部段階に重複して示されていたり、「友達からの呼名に応じる」「隣人・知人からの呼名に応じ、返事をする」などのように、相手を変えたり、内容を少し複雑化させたりして、類似した内容が配置されている箇所が多かった。このため、各ライフステージにおける代表的で具体的な内容を選定しなおし、分かりやすく示す必要があった。そこで幼稚部からの提案を踏まえ、「自分の名前が分かり、呼ばれて返事をする」は幼稚部段階に、「自分のものと友達のものを区別できる」は小学部の低学年段階にそれぞれ配置された。重複して記載されていた類似項目は削除した。

小学部の研究から提案された友達や仲間との関係に関しては、中学部段階に比較的多くの内容が記載されているのに対して、その前段階である小学部段階には関連する内容が少なかった。しかし、前述したように小学部段階から、友達や仲間との関係の形成に関するニーズはあり、実際に授業を設定して取り組んできていた。そこで小学部からの提案を踏まえ、「友達を応援する」「友達や仲間の良いところを認める」を追加することとした。作業グループで各学部での実践を振り返って検討した結果、中心的に取り組む時期として、「友達を応援する」は小学部高学年段階に、「友達や仲間の良いところを認める」は中学部段階にそれぞれ配置された。

２．重複する項目の削除

ほぼ同じ内容が複数のライフステージ、複数の相手との関係に配置されていることが、コミュニケーション関係支援内容配列表には特に多くみられた。そこで、前述した「○○からの呼名に応じる」のように、重複している項目を抜き出し、内容が類似しているものをまとめたリストを作成した。作業グループで各学部段階での実践を振り返り、それぞれの内容に関して中心的に取り組む時期を選定した。検討を踏まえて、中心的に取り組むライフステージ以外の場

所に配置された項目は削除した。こうした検討において、特に重複が多くみられたのは、小学部の中学年段階であった。現行の支援内容配列表では、小学部段階は低学年・中学年・高学年の３つの段階に区分されていたが、中学年段階に記載された内容のほとんど全ては、低学年もしくは高学年の段階に重複して記載されていた。中学年段階に独自な内容を提示する必要性は低く、むしろ中学年という段階を設けることで、項目の過剰な重複が生じていると考えられた。そこで、支援内容配列表が全体を俯瞰する機能をもつことを目的としていること、他の支援区分では小学部を３つに区分していない場合もあることを踏まえ、生活支援内容配列表と同様に小学部中学年という区分そのものを見直し、小学部段階は小学部低学年と小学部高学年の２つの区分でとらえることとした（図１１）。

Ⅳ　新たな授業の提案

１．幼稚部「象徴遊び」

今回の改訂で、自他の区別の代表例として「自分の名前が分かり、呼ばれて返事をする」「自分のものと友達のものを区別する」という内容を追加した。しかし、自分の名前の理解や所有物の区別だけが自他の区別へのアプローチではない。例えば、人形を使った象徴遊びでも自他の区別に関する学習に取り組むことができる。一般的に人形を自分に向けて扱うとき、人形は他者の象徴として扱われるし、人形を他者に向けて扱っているときは自己の延長として扱われる。子どもは人形を自分に向けて動かしたり、相手に向けて動かしたりするが、そこに大人が上手く関わることで人形を自己や他者の象徴として操作していくことにつながる。「象徴遊び」では、園庭にある遊具のミニチュア版のセットを遊戯室に設置し、自分たちが現実に経験している遊びを人形やミニチュアの遊具を用いて再現しながら遊べるようにした。こうした環境設定のもと、自己の行為を客観的に意識化したり、人形を他者に見立てたりしながら遊びを展開することができた。

２．小学部低学年「おはなしであそぼう」

「おはなしであそぼう」は主に学習支援の授業として位置づけられ、物語等を活用して豊かな情操や表現力を育てるために設定されている。こうした学習の中でもコミュニケーション支援の課題に取り組むことはできる。特に「おはなしであそぼう」では、子どもたちが親しんでいる物語を演じることを通して、お互いにこのように振る舞うだろうという筋書きを利用しながら児童同士のやりとりに取り組むことができる。低学年学級では、「ももたろう」を題材として、授業を行った。桃太郎といぬ、さる、きじできびだんごをやりとりする場面では、セリフカードなどの教材を提示しながら、物を介して繰り返しやりとりを行うことで、児童同士での「どうぞ」－「ありがとう」のやりとりがスムーズにできるようになった。また、支援内容配列表で新たに追加された「友達を応援する」については、桃太郎役が難しい課題を解決して姫を助ける場面を設定し、友達の演技をみて応援できるように工夫した。

３．小学部高学年「つたえよう」

「つたえよう」は、小学部の高学年を対象にコミュニケーション支援に特化した授業として設定されている。児童同士の様々なやりとりを促すことをねらいとして、２チームの対抗でい

くつかのゲーム活動を行う。例えば、おみこしわっしょいでは、４～５人でひとつのおみこしを運ぶ。ここでは、全員で一緒に運べるようにチームメイトに呼びかけたり、あえて不安定な台座を用意して、互いの動きを調整し合って運んだりすることをねらいとした。また、パズルリレーでは、みんなで順番にピースを運んでパズルを完成させる。この際、教える役の児童のみに答えを提示することで、児童同士で教える、助けるといった関わりが生まれるようにした。支援内容配列表に追加された「友達を応援する」については、チームの代表者同士によるつなひき対決を設定した。ここでは代表者同士の勝負の結果をチーム全体にフィードバックし、その際に iPad や TV モニターを用いることで、普段友達に注意が向きにくい児童でも友達の活動に注目しやすいようにした。その結果、友達のつなひきに注目したり、応援したり、結果発表を受けてチームメイトとハイタッチして喜び合ったりする様子がみられるようになった。

４．中学部「コミュニケーション」

中学部では、選択授業として「コミュニケーション」の授業を設定している。今年度、この授業では、コミュニケーション関係支援内容配列表に追加された「友達や仲間の良いところを認める」に取り組んだ。最初にゴムとびなど、気持ちをほぐすゲームを行い、その後に、お互いの良いところを伝え合う活動を行った。グルーピングや話す順番に工夫して場面を設定したことで、普段は自分から主張したり、積極的に相手に気持ちを伝えたりすることが少ない生徒も、自ら挙手して友達の良いところを伝える姿がみられた。

５．高等部「総合学習」学習発表会

高等部では、「調べる」「聞く」「話し合う」「発表する」をキーワードに、「総合学習」の授業を設定しており、学習発表会の単元では、舞台上で劇を演じることで、これまでに学習してきたことを来客者の前で発表する。この授業は主として学習支援に位置づけられるが、この中でもコミュニケーション支援は取り組まれる。例えば、学習発表会の劇の配役については、オーディションを行い、生徒と教員の投票によって決定される。ここでは生徒同士で互いの演技をみて、「友達や仲間の良いところを認める」ことに取り組んでいる。劇の練習の過程でも、お互いの演技を見合って良いところを伝え合ったり、さらに良くするために助言し合ったり、また一緒に劇を作っていくために励まし合ったりすることを通して、生徒同士の関係を深めている。今回のコミュニケーション関係支援内容配列表の改定では、高等部段階には、特に新たな内容は追加されなかったが、これらの活動は小学部高学年や中学部段階に追加された「友達を応援する」「友達や仲間の良いところを認める」の先にある発展的な内容に該当すると考えられる。

Ⅴ　まとめ

今回の改定では、ライフステージごとの代表的な支援内容の見直しを行った。しかし、当該のライフステージを代表する妥当な内容が絞られていない箇所は、まだいくつかみられる。今後、これらの点について検討していくことが必要である。また、近年のＩＣＴの発展や福祉制度の改正は、子どもたちが参加する場や関係の結び方に変化をもたらしている。こうした状況の変化に伴う教育的ニーズを把握し、教育課程に反映させていく作業が今後も必要であろう。

（文責：仲野）

コミュニケーション支援
指導略案

学部：幼稚部
場所：ひかり組教室

「幼児の人間関係の発達を促す人形遊びの授業」

授業名	象徴遊び 「人形遊び－ひかり公園で遊ぼう！－」	指導者	ＭＴ：亀田隼人 ＳＴ：安永啓司、小榑あすみ、 岡本有未
対象者	幼稚部　ひかり組　幼児　５名（男子１名、女子４名）		

設定理由

□関連する支援内容配列表項目

	友達・仲間との関係
幼稚部	○友達と同じ場を共有し同じ体験をする
小学部（低）	○自分のものと友だちのものが区別できる

課題遊び「象徴遊び」は、幼児が主体的に活動することを通して人の行為や気持ちに関心をもち、幼児相互の関係を深めていくことをねらいとしている。

ひかり組は、知的障害や発達障害のある４、５歳児の幼児５名の集団である。発達段階は概ね１歳半から３歳程度の範囲にある。基本的生活習慣に関する行為については、学校や家庭生活の文脈の中で、着替えや食事などの行為に繰り返し取り組んでいる。また、同年代の友だちの存在に興味をもつようになっている。しかし、対人関係や社会性の発達が未熟なため、教員の仲介がなければ友だち同士で関わりながら遊び続けることは難しい。

人形遊びは、幼児がすでに経験している行為や遊びを再現することができ、自分の動作や行為を意識したり、想像したりすることを促す手段として有効である。また、人形には、操作することで擬似的に他者に見立てたり、人形になり代わったりして遊べるおもしろさがある。幼児は、学校や家庭生活で様々な遊具で遊ぶ経験を重ねている。幼児が経験したことのある場面を設定することにより、自分たちが楽しかった経験を思い出してほしいと考えた。人形遊びを通して、人の社会的な行為への気づきや他者の気持ちや意思への関心を深めてほしい。またその結果として、友だちとの関わりを楽しんだり、友だちとよりよく接したりすることができるようになることを願って本題材を設定した。

指導計画

（全６回　本時：３時間目）

１～６回：「鬼ごっこ」「公園遊び」
「ままごと遊び」
※３時間目から「公園遊び」の設定にアスレチックを追加する。

本時の目標

○ストーリーに沿った言葉のやり取りを楽しむ。
○自分が経験した遊びや行為を再現したり想像したりする。
○人形を介して友だちと仲良く遊ぶ。

学習活動の展開

	学習活動	指導内容・留意点
（１）	「キティーちゃんと鬼ごっこ」 ・鬼役（ミニー）と子役（キティー）になり鬼ごっこで遊ぶ。	・ストーリーがわかって台詞を言ったり人形を操作したりする。
（２）	・遊戯室に移動し、好きなコーナーで人形を操作して遊ぶ。 【アスレチック遊具コーナー】 アスレチック、ブランコ等 【家コーナー】 キッチン、電話等	・自分が楽しく遊んだ経験を思い出す。 ・共有の遊具を交替して使うことに興味をもつ。 ・人形が遊具で遊んだり、食事をしたりしていることを想像する。
（３）	・人形に「さようなら」を言ってソファーに帰す。	・人形を片付ける場所がわかる。

評価

○人形などを介して経験した行為を再現したり、想像したりできたか。
○楽しんで活動できたか。

コミュニケーション支援

幼稚部

ひかり組「象徴遊び」

亀田隼人

関連する支援内容配列表項目

	友達・仲間との関係	
幼稚部	友達と同じ場を共有し、同じ体験をする。	
(低)小学部	自分のものと友達のものが区別できる。	

☆幼児が人間関係を学ぶ機会は実生活の中にこそある！
☆実生活の中にある人間関係のドラマ（印象に残る展開）があるからこそ人形遊びの環境やその授業がそれらの発達を促すきっかけや手立てとなりうる！

「幼児の人間関係を促す人形遊び」

〈実態〉
知的障害や発達障害のある４歳児2名、5歳児3名。

【参考】「自他の区別」に関する他の取り組み
○「芋ほり」　：自分の、友達の、みんなの。
○「生活の中で」：個別のマーク など。

〈人形遊びの見方と評価〉
①人形を他者に見立てて遊ぶ体験の流れ
②人形のふりをして遊ぶ体験の流れ

〈人形遊びの教育的効果〉
・人の行為や気持ちに気づいたり関心を持ったりすることを高める
・自らの動作や行為を意識したり考えたりすることを高める
・印象に残る過去の経験を思い出したり再現したりすることを高める

本授業（本単元）の指導計画
【１～６回】「鬼ごっこ」「公園遊び」「ままごと遊び」
※３回から「公園遊び」の設定に「ひかり号」を追加する。

本時

「鬼ごっこ」

☆鬼ごっこ：他者と関わる初期の遊びの1つ。
☆「鬼ごっこ」：イメージ遊びの世界へ誘うための導入的題材。
☆人形劇から冬季単元「元気なからだ」の１つの活動として展開。

イメージからリアルへ！

この部分は公開に適さないため掲載できません。 → この部分は公開に適さないため掲載できません。

リアルからイメージへ！

この部分は公開に適さないため掲載できません。 → この部分は公開に適さないため掲載できません。

この部分は公開に適さないため掲載できません。 → この部分は公開に適さないため掲載できません。

この部分は公開に適さないため掲載できません。 この部分は公開に適さないため掲載できません。 → ？

「公園遊び」

☆年末に新設した遊具（ひかり号）を人形用に作成。

幼児用

人形用

☆社会的な要素（「切符で入場」「順番」）を取り入れた。

コミュニケーション支援
指導略案

学部：小学部
場所：星組教室

「役割演技を通して、児童同士の関係を育む授業作り」

授業名	おはなしであそぼう 「ももたろう」	指導者	MT：清水　麻由 ST：吉田　友紀
対象者	小学部　星組　児童　1年2名、2年2名、3年2名（男子5名、女子1名）		

設定理由

□関連する支援内容配列表項目

	友達・仲間との関係
小学部(低)	○友達に呼びかけたり、要求を伝えたりする
小学部(高)	○友達を応援する

□関連する個別教育計画の目標

「友達と適切な関わり方で遊ぶ」「会話で使える言葉を増やす」など

「おはなしであそぼう」の授業では、物語の内容に親しみ、役割演技を通して、言葉や動作を身につけることをねらいとしている。友達とのやりとりを行うことで、友達への関わり方を学ぶ機会を設定している。本授業では、支援内容配列表の「友達に呼びかけたり、要求を伝えたりする」と新たに加えた「友達を応援する」を内容に取り入れている。

本学級の児童6名の中には、友達を遊びに誘うことができる児童、友達が遊ぶ様子を見るが、一人で遊ぶことを好む児童などがおり、友達への関わり方は様々である。「おはなしであそぼう」の授業では、自分が役割演技をすることには積極的な児童が多いが、友達の役割演技に注目し続けることが難しい、といった実態がある。本題材では、「ももたろう」の物語を用い、児童は桃太郎と動物達を演じる。桃太郎達が鬼から姫を助ける場面では、全員が桃太郎の仲間になることで、自分の番ではない時も友達の活動に注目し、応援する気持ちが生まれることを期待する。役割演技では、セリフを文字と絵で示すことで、自分の役割が分かるようにし、繰り返しのある場面を演じることによって、友達の様子を見て、セリフを覚えられるようにした。また、鬼から姫を助ける場面では、児童にとって少し難しい課題を設定し、その課題に向かってがんばる友達を見て、応援したいと思えるようにした。

指導計画

（全4回　本時：4/4）

①物語の内容を知ろう（1h）
②役割演技を通して、セリフのやりとりをしよう（3h）
＊学習発表会（2月）に向けた学習でも本題材を取り扱う。

本時の目標

○役割演技を通して、友達とセリフのやりとりをする。
○友達の活動に注目し、応援する。

学習活動の展開

	学習活動	指導内容・留意点
(1)	・「はじまりのうた」を歌う。	・授業のはじまりが分かる。
(2)	・パネルシアターを見て、「桃太郎」のお話を振りかえる。	・登場人物や物語の流れが分かる。
(3)	・桃太郎と動物達が仲間になる。	・友達とセリフや物のやりとりなどの役割演技を行う。
(4)	・オニから姫を救うために、きびだんごを集める。	・友達ときびだんごを集める。 ・活動している友達に注目し、応援する。
(5)	・ダンスをして、姫が帰ってきたことをお祝いする。	・友達とペアになり、音楽に合わせて踊る。

評価

○自分が前に出て活動しない時にも、友達の活動に注目したり、応援したりすることができていたか。

コミュニケーション支援

小学部

星組「おはなしであそぼう」

清水　麻由

関連する支援内容配列表項目

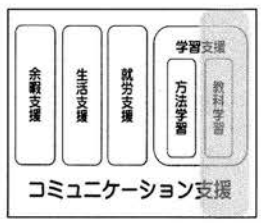
	友達・仲間との関係	
小学部(低)	**友達**に**呼びかけたり**、要求を**伝えたり**する。	
小学部(高)	友達を**応援**する。	

役割演技を通して、児童同士の関係を育む授業作り

・「おはなしであそぼう」とは…

＊「学習支援」の支援区分に位置づけられる。

＊豊かな情操や表現力を育てるために、物語等を活用してロールプレイ場面を設定し、「役になりきる」「演じる」ことにより第三者的立場で客観的に善悪の判断や学習ができるように設定されている。



・星組の児童の実態

ダウン症児３名、ＡＳＤ児３名

IQ39～IQ66　MA2歳７か月～5歳6か月

主なコミュニケーション手段　サインを併用する児童もいるが、音声言語を主に使う。

・授業の目標

○役割演技を通して、友達とセリフのやりとりをする。

○友達の活動に注目し、応援する。

本授業の指導計画

①物語の内容を知ろう

絵本

パネルシアター

ダンス

役割演技

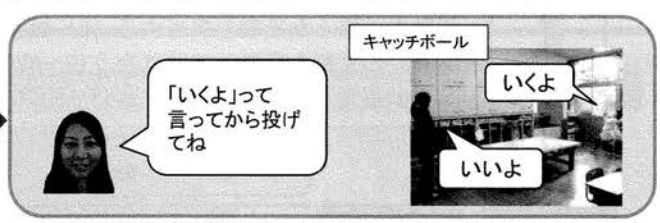
本時　②役割演技を通して、セリフのやりとりをしよう

1．役割演技で行ったやりとりを　日常生活のやりとりにつなげていく

相手が見ていない時に、ボールを投げる →

おむすびころりん

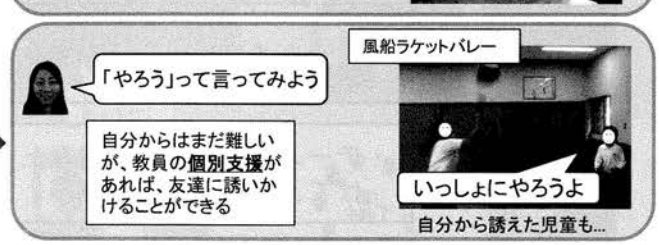
→



自分から友達を遊びに誘うことが難しい →

ミックスジュース・ももたろう

→



相手が見ていないのに、話しかける →

「**ももたろうさん**
きびだんごをください」

「どうぞ、ありがとう」を一人で言ってしまう →

「**どうぞ**」「**ありがとう**」
きびだんごのうけわたし

2．友達の活動に注目して、応援する

自分の出番には積極的だが、友達の活動を見ることが難しい →

“みんなが桃太郎の仲間”という役割設定

簡単すぎず、難しすぎない活動

新奇性、動きや変化のある活動

→

・友達にきびだんごの場所を教えてあげる姿

・達成した時に、見ている児童も一緒に喜ぶ姿

コミュニケーション支援
指導略案

学部：小学部
場所：プレイルーム

「児童期の仲間関係を育むチーム対抗のゲーム活動」

授業名	つたえよう 「チームで協力しよう！」	指導者	MT：仲野真史 ST：松本直巳 ST：熊谷直樹
対象者	小学部　海組　児童　４年３名、５年３名、６年３名（男子５名、女子４名）		

設定理由

□関連する支援内容配列表項目

	友達・仲間との関係
小学部（高）	○友達を応援する

□関連する個別教育計画の目標

「自分の意思を伝えられる相手や場面を増やす」「その場に応じたやりとりができる」など

小学部では、様々な場面で友達と協力する活動を設定し、児童同士の関係の形成を図っている。特に本授業はコミュニケーション支援に特化した授業として設定されており、支援内容配列表に記載された「友達を応援する」等の内容に取り組んでいる。

海組は９名の児童が在籍しており、発達段階や得意なコミュニケーション手段は様々である。普段は友達の行動に自発的に注目することが難しい児童も多い。本題材では、２チームに分かれて、協力してものを運ぶ活動やパズルを完成させる活動などを行う。チームの目標や互いの役割を見て分かりやすいように、協力内容や環境設定、教材等を工夫している。また、モニターを使ってフィードバックをすることで、チーム全員が活動の結果への注目を共有しやすいようにする。一人の活動に対してもチーム全員にフィードバックすることなどで、仲間を意識して応援することを促す。

指導計画

（全８回　本時：６/８）

・活動の流れを知る（1回）
・活動内の様々な役割を担当する（2～4回）
・お互いの役割を意識して助け合う（5～6回）
・友達の頑張ったことを評価する（7～8回）

本時の目標

○チーム対抗戦の活動の中で同じチームの仲間を応援する。
○チームの仲間と協力してパズルを完成させる。

学習活動の展開

	学習活動	指導内容・留意点
（1）	・チームメンバーを発表する	・自分や友達がどちらのチームかを知る
（2）	・チームでおみこしを積み上げて、目標地点まで運ぶ	・友達に呼びかける ・友達と動きのタイミングを調整し合う
（3）	・チームから代表者が出て綱引きをする	・友達を応援する ※応援の型を決めておく
（4）	・リレー形式でピースを運び、チームでパズルを完成させる	・友達に貼る位置を教える ・友達からの情報提供に応じる
（5）	・今日の頑張ったことを発表する	・自分が頑張ったことを振り返る ・友達が頑張ったことを知る

評価

○チームの仲間を意識して、助け合ったり、応援したり、一緒に喜び合ったりしたか。

コミュニケーション支援

小学部

海組「つたえよう」

仲野真史

関連する支援内容配列表項目

	友達仲間との関係	
小学部	友達を応援する。	
中学部	友達・仲間の良いところを認める	

仲間関係を育むチーム対抗のゲーム活動

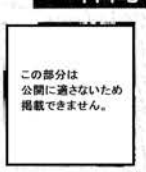
- **「つたえよう」**
  コミュニケーション支援に特化した授業
  スキルの獲得よりも、スキルの活用や人間関係への参加を重視
  小学部高学年が対象
- **参加児童**　9名（4～6年）
  ASD児3名　ダウン症児4名　知的障害児2名
  MA 1;10～5;2　　IQ22～49
  主な伝達手段　サイン、絵カード、音声言語（一語文期～会話期）
- **目標**
  チーム対抗戦の活動の中で同じチームの仲間を応援する
  チームの仲間と協力してパズルを完成させる

本授業の指導計画

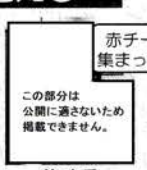
①各活動のルール・目標を知る
②活動内の様々な役割を担当する
本時 ③お互いの役割を意識して助け合う
④友達の頑張ったことを評価する

毎回の活動内容
1 おみこしわっしょい
2 つなひき
3 パズルリレー
4 MVP発表

仲間を知る



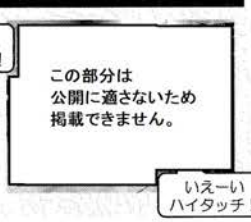
はっぴを配る

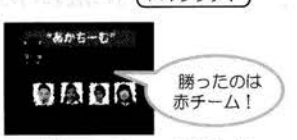


集まる
呼びかける

チームの色のはっぴ

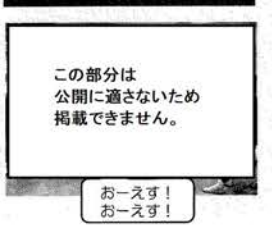
情動を共有する

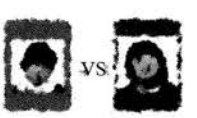




チーム全体へのフィードバック

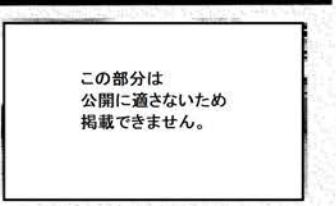
仲間を応援する

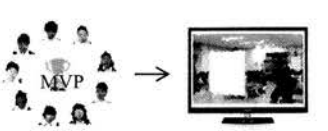




代表同士の勝負

仲間の頑張りを認める





頑張ったことを写真で提示

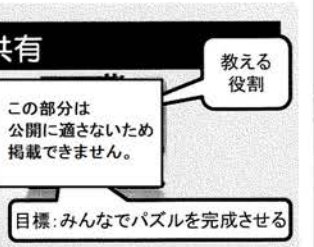
多様なモード・機能での伝達

誘う　教える　振り返る

目標・役割の共有

- チームで達成する目標はなにか
- そのために自分は何をするのか
- そのために友達は何をするのか

協力する　助けあう
応援する　評価する



目標や役割を見えやすくする